Latvija
日本ラトビア音楽協会ニュース
第12号
（2008年6月5日発行）

日本ラトビア音楽協会事務局
〒229-0014 神奈川県相模原市若松1-14-10 遠藤税理士事務所内
Tel 042-745-3334 Fax 042-740-4725
E-mail 0424668801@jcom.home.ne.jp

発行代表者 加藤晴生
〒277-0823 千葉県柏市布施新町2-18-9 Fax 04-7132-5423
E-mail katohr@earth.ocn.ne.jp

編集代表者 徳田浩
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田3-31-6-504 柔道新聞編集室
Tel・Fax 03-3203-0363
E-mail htoku@pastel.ocn.ne.jp

沖縄に続き、北海道、大阪に名誉領事館開設

2006年4月に大使館が設立されて2年余、P、ヴァイヴァルス初代大使は精力的に全国各地に足を伸ばして名誉領事館配置に努め、昨年6月の那覇に続き、3月13日に北海道、5月16日に大阪に名誉領事館を開設した。大阪での披露レセプションにはラトビア本国から、シュレッセルス運輸大臣夫妻も出席、高村正彦外務大臣もメッセージ（右に掲載）を贈った（山崎関西担当大使代読）。

名誉領事館開設のご挨拶

駐日ラトビア共和国大使 ペーテリス・ヴァイヴァルス

在日ラトビア共和国大使館が平成18年4月に開設され、初代大使として着任して以来、大使館としては日本各地に名誉領事館を配置することを大切な課題として取り組んでまいりました。このたびご縁があって各地に素晴らしい候補を得て、平成19年6月に日本の南端沖縄の那覇市に最初の名誉領事館を開設し翁長良光氏に名誉領事として就任していただきました。引き続き平成20年3月には北海道旭川市に名誉領事館を開設、井下佳和氏に名誉領事となることをお願いいたしました。そして今回5月16日には、日本第二の都市大阪に名誉領事館を開設し名誉領事として東郷武氏にお願いいたしました。

ヴァイヴァルス大使が名誉領事信任状授与（上）大阪・東郷武氏（下）旭川・井下佳和氏

ラトビアは大変親日的な国ですが日本もそれにおとらず大変な親ラトビア国家であることにいつも驚かされております。名誉領事館の開設は日本各地の方々の善意とご支援がなければ実現しませんでした。とくに各県知事や市長の方々から大歓迎されたことは忘れることができません。この機会にあわせ関係された皆様一人一人に対しお力添えを頂いたことを心からあつく御礼申し上げたいとぞんじます。しかしながら友好親善というものは不断の努力を重ねることが不可欠です。

名誉領事館の全国展開は、このような日本ラトビア両国のニーズと期待に答えるものでもあり各名誉領事館には、両国の友好促進、文化交流の促進、経済関係の強化に各地の特色を生かしつつその意義を果たして頂ければと期待しております。各地において初代名誉領事に任命申し上げた方々は、卓越した識見、高潔な品性、輝かしい力量をもった方ばかりであり大変誇りに思っております。

つきましてはこの機会に皆様からの各名誉領事に対する積極的なご支援を頂けますよう心からお願い申し上げます。

在大阪ラトビア共和国名誉領事館開館

外務大臣 高村 正彦

【提供：外務省】

在大阪ラトビア共和国名誉領事館が開館されたことに対し、心よりお祝い申し上げます。

我が国とラトビア共和国は、基本的価値を共有するパートナーであり、2006年に新たな外交関係開設15周年を迎えました。

2007年5月には天皇皇后両陛下がラトビアを御訪問になり、その年の6月にはパブリクス外相が訪日されました。こうした要人往来に象徴されるとおり日本とラトビアの二国間関係は着実に進展しており、外務省としては更に関係を深化させていきたいと考えております。

今回、新しく就任された東郷名誉領事が、ここ大阪を拠点として、様々な分野における両国の交流を一層深めるために、御活躍されることを心より期待しております。

平成20年5月16日

I wish to express my heartfelt congratulations on the opening of the Honorary Consulate of the Republic of Latvia in Osaka.

Japan and Republic of Latvia are partners which share basic values and the year 2006 marked the fifteenth anniversary of the establishment of new diplomatic relations.

In May 2007, Their Majesties the Emperor and Empress of Japan visited Latvia and in July of the same year, Dr.Pabriks, Foreign Minister of Latvia, visited Japan. Such mutual visits have led to the steady development of the relations between Japan and Latvia. We are determined to further enhance our bilateral relationship

I wish the newly appointed Honorary Consul, Mr.Togo, enjoy every success in his duties in Osaka so that the exchanges between two nations should further deepen in various fields.

Masahiko Koumura
Minister of Foreign Affairs of Japan
May 16, 2008

在大阪ラトビア共和国名誉領事館開設にあたって

在大阪ラトビア共和国名誉領事
東郷 武

去る5月16日、ラトビア共和国シュレッセルス運輸大臣、ヴァイヴァルス特命全権大使ご臨席のもとに大和ハウス工業株式会社の大阪本社ビルの一階に在大阪名誉領事館が開設され常任顧問の東郷が名誉領事に就任しました。外務省関西大使の山崎氏、大阪府知事の三輪氏、大阪市長代理をはじめ塩川前財務大臣、前大使の天江氏その他いろいろな方面の文化団体の方々約250名の参加を得て、その関心の高さに感激しました。

このお話は昨年の初めに前大使の天江氏が大和ハウス工業元会長の石橋氏に他の名誉領事を通じて打診され、それが私にお鉢が回ってきたのですが、ラトビアの主要産業の一つが木材産業であることから建設・住宅の大和ハウスが適切であろうということがきっかけになったようであります。ラトビアは音楽特に合唱が有名で日本にも知られていますが、私の興味は過去常に大国に支配され、1940年からはソ連邦の一部であったこの小国が、民族の言語・文化のアイデンティティを失わずに1991年に再独立を果たし、EUに加盟して自由主義国家としてスタートしたこと、そして若い人達がこの国を引っ張っている姿に成熟した他の国にないものを感じとったことでありました。日本の経済界は消費人口

（次ページへ続く）

東郷大阪名誉領事

（前ページより続く）

が多くまた豊富な労働人口を抱える中国、インド、ロシアなどに目が行き、ラトビアとの経済交流は当面マイナーな状態が続くと思われます。シュレッセルス運輸大臣が力説されたようにリガに大きな空港が出来れば、その地勢からバルト三国のみならず北欧のハブ空港となり、ロジスティックスと金融、商業の中心地になる可能性をもっていると思います。当面は音楽などの文化交流や観光の拡大などを図りながら、日本とバルト地域を含む北欧との絆を深めていけば将来の大きな国際交流の新しい流れを生み出せるかもしれないなどという夢を描いています。

関西では神戸市がリガと姉妹都市で、既に交流の実績がありますが、関西全域でのいろいろな交流が出来る仕組みが必要です。この名誉領事館がささやかながらそのお役に立てれば嬉しいと思っています。

「私とラトビア」

在旭川ラトビア共和国名誉領事

井下　佳和

在大阪ラトビア共和国名誉領事館開館並びに東郷武名誉領事ご就任誠におめでとうございます。

旭川では、今年3月13日に北海道を管轄する在旭川ラトビア共和国名誉領事館が開館したばかりです。名誉領事館は北海道第2の都市旭川にありますが、これまでラトビアとの交流を続けているのが隣町の東川町です。東川町は北海道で一番高い山「旭岳」と、日本で一番広い大雪山国立公園を有し、写真の街としても有名です。ラトビアとの交流のきっかけは「写真」です。

ラトビアが独立を勝ち取った1年後の1992年、東川町でバルト3国展が開催されました。オープニングに、当時ラトビアの文化大臣だったライモンズ・パウルスご夫妻が出席され、加藤登紀子さんの百万本のバラをピアノ演奏されました。そして、この曲が大臣の作曲と聞き大変盛り上がりました。当時、東川文化交流協会会長の佐藤忠雄さんらが中心となって東川ラトビア交流協会が立ち上げられ、以来今日まで途切れることなく交流が続いています。

私がラトビアに初めて行ったのは、佐藤忠雄会長が参加した炎のプロジェクト（同じ土と炎で陶芸の作品を作る）企画の同行取材でした。

「国と町は文化でつながる」のタイトルで、テレビ番組を制作放送しました。ラトビアの美しい町並み、人々の優しさ、そして驚く事に写真の街東川と共通点が沢山ありました。ジグルダにある写真の丘、リガにある写真博物館などです。その時、私と同行していた町職員の伊藤さんの3人で、ラトビアの素晴らしさを日本中に東川町から広めて行こう（ラトビア館とホームページ）、写真の丘を作ろう（いつか写真家が集える丘）、領事館を東川に誘致しよう（おらが町の領事館）と3つの約束をしました。

帰国して2ヶ月目の12月、佐藤会長が急逝。その後ラトビア協会や町の皆さんが会長の遺志を受け継ぎ、翌年には東川町内の小高い丘の上に有る私の会社の1階、オーラス研究所にラトビア館と写真の丘をオープンさせました。領事館だけが達成できませんでしたが、2008年3月13日、ついに名誉領事館が開館のはこびとなり、8年越しで3つの約束を達成する事が出来ました。

2007年11月には、松岡東川町長を団長に9名の視察団を結成してラトビアのルーイヤナ町（リガから車で北へ3時間、エストニアに近い人口4,000人の町）を訪問して来ました。ルーイヤナ町は駐日特命全権大使ペーテリス・ヴァィヴァルス閣下の生まれ故郷であり、閣下の縁結びで今年7月にはルーイヤナ町と姉妹提携する予定です。

私は、これから益々ラトビアの情報を北海道にもたらす為に、各名誉領事館との連携を取りながら経済・文化交流の輪を広げて行きたいと思います。

ラトビア館には長い友好の歴史を物語る資料が数多く展示されている

祝・在北海道、大阪両ラトビア名誉領事館開設

在那覇ラトビア共和国名誉領事

翁長　良光

空手着を着用した
翁長良光在那覇名誉領事

北海道・旭川に続いて、在大阪ラトビア共和国名誉領事館が開設されたことを心からお祝い申し上げます。私は2年前、空手指導のためリガを訪問いたしました時、当時の外務大臣、アルティス・パブリクス博士より、沖縄でラトビア名誉領事を引き受けてくれないかとのお話を受け、大変光栄なことと存じお引き受けしました。その後、平成19年6月に同外務大臣が日本を訪問された時に、正式に在那覇ラトビア共和国領事館が開設され、同時に私が名誉領事に任命されました。沖縄の名誉領事館は、日本で開設された領事館一号ということで私は大変緊張したことを覚えております。幸い沖縄に名誉領事館が置かれることに対しては、沖縄県知事や那覇市長からも大歓迎され格別の応援をいただきました。

前外務大臣自身が大変な空手ファンですし、ラトビアでは空手など日本の武道への関心が大変高いこともあり、私に期待される使命は、空手指導を通じてラトビアの若者に日本武道の正しい精神を伝えることによって、新生ラトビア建設に役立つことであります。このため毎年リガを訪れ、空手特別訓練コースを実施しております。これには本部道場より最も優秀な師範3名程度を同伴し、約30名の生徒に特訓を授けています。ラトビアの生徒は大変優秀で、極めて稽古熱心なことに驚かされている次第です。今年は生徒急増のため支部を設立しなければならなくなりました。

本年は7月にラトビアで海外の全名誉領事を集めた会議が開催されるため、小規模ながら沖縄から経済ミッションを引き連れて訪問することになっています。先般は北海道、引き続き今回5月には在大阪ラトビア名誉領事館が開設されたことを大変心強く存じております。名誉領事館が開かれると、日本人のラトビアに対する関心が確実に高まってまいります。ラトビアは大変な親日国です。今後は、各名誉領事館と協力しながら、武道振興・経済交流のほか、近い将来は幅広い青年交流にも活動を拡大したいと夢を描いております。

レセプションに250名出席

（大阪）

大阪の名誉領事館開設は大和ハウス工業㈱1階で来日中のシュレッセルス運輸大臣夫妻、ヴァイヴァルス大使、東郷新名誉領事、村上大和ハウス社長らがテープカット。大使から名誉領事信任状を授与されたあと、会場を2階の大ホールに移して同社主催の開館記念レセプションが開かれ、約250名が出席する盛会だった。

レセプションは大阪シンフォニカ交響楽団のフルートとハープ奏者による両国国歌演奏に始まり、鏡割りに続く乾杯から多くの来賓が挨拶。

主な来賓はシュレッセルス運輸大臣、ヴァイヴァルス大使の他、山崎関西担当大使、天江同前大使、三輪大阪府副知事、平松大阪市長、塩川正十郎元財務大臣、中曽根ラトビア議員連盟会長、井下旭川ラトビア名誉領事、井出ルクセンブルグ名誉領事、笹山前神戸市長ほか。シュレッセルス運輸大臣は「リガ空港利用者は400万人で、2012年までに600万人になる。現在空港関連施設を拡充中でバルト、北欧のハブ空港になる。リガ・日本直行便が実現すれば5時間短縮できる」と早期実現を訴えた。これに対してある来賓が「成田は混んでいるから関西空港へどうぞ」と応酬して参会者を喜ばせた。約1時間半のレセプションだったが後半は東郷名誉領事自らが司会して来賓挨拶に応対した。

大和ハウス工業は企業メセナの一環として在大阪ラトビア名誉領事館をサポートする方針で、東郷名誉領事は産業面はもとより、文化面特に音楽の交流を充実させたいと強調した。

当協会からは加藤晴生専務理事、松原千振常務理事、山本徳行、田中享風呂元武敏各顧問、洲脇光一会員らが出席した。

在旭川ラトビア名誉領事就任パーティーで歌う

小田陽子の旭川日記

歌手小田陽子さんはレポーターとしても一流！

3月13日

羽田から1時間あまり、何度も訪れたような気になっていたが、実は2回目の旭川。到着ロビーで初めて駐日ラトビア大使ご一行と同じ便だったと分かった。

ラトビアと長年親交を重ねてきたのは上川郡東川町。そこに隣接する旭川市にラトビア名誉領事館が開設されることになった。その記念レセプションで、ラトビアのヒット曲「マーラが与えた人生」（百万本のバラの原曲）を実演披露！という大役を仰せつかった。なのに現実は非情。3日前からモノモライが誕生して悪戦苦闘。なんとかなだめすかしたが、「こんなときに限って」は世の常だ。

急遽決ったスケジュールとはいえ、“大役”の割には一連のタイムスケジュールは皆目分からないまま。まあ、行ったところ、出たとこ勝負！。そんな私も主催者ものんきなものだ。しかし案ずること無かれ、空港からはベルトコンベアに乗っているような用意周到ぶりだった。同時に到着された山本徳行スウェーデン名誉領事夫妻と共に一同、会場の旭川グランドホテルへ移動。名誉領事に就任する井下佳和氏に昼食会のもてなしを受けた。これがまた春うららの和やかさ。

井下佳和氏は地域のあり方を真摯に考え、エネルギッシュに活動されている。株式会社北海道録画センターの代表取締役社長で、一昨年もお会いしている。英国風の髭が印象的でまさしく眉目秀麗。ゆえにちょっとアブナイ男を匂わせていた記憶があるが、なんのなんの、豪放磊落で真面目と豪胆が同居した、実にザックリした愛すべきご性格だった。

午後6時から同ホテルで「在旭川ラトビア共和国名誉領事館開設式典」続いて「名誉領事に就任した井下佳和氏を祝うパーティー」が開かれた。ここで不肖小田陽子もお祝いに2〜3曲と相成った。炸裂するフラッシュ、ひしめく出席者の間を泳いで歌う。モノモライもどこへやら。

報道席には多くの記者やNHKのクルーも来ていて予想以上に大がかり。翌日の新聞も大く報道し、NHKは放送すること3回。ヴァイヴァルス大使は16歳になるご子息ヤーニス君と、やたらハンサムな書記官のオレグス氏を伴って出席。何しろ2メートルはあろうかという長身だから演台に立つと迫力のあること！

パーティ終了後はトップラウンジでご一行共々こっそり？打ち上げ。大使は日本酒がお気に入りとみえてクリスタルグラスでスルスル召し上がっていた。私は同じクリスタルグラスでタンカレー（ジン）のストレートをこっそり。のん兵衛の秘技だ。

ラトビア大使、ラトビア名誉領事、スウェーデン名誉領事夫妻、そしてスットコドッコイ歌手が片言英語で盛り上がるのだから、これぞ踊る外交？

3月14日

午前中、大使一行が各所を表敬訪問されている間、私はご子息のヤーニス君と旭山動物園へ。

朝から大繁盛で次々に大型バスが入ってくる。その殆んどが中国人というのもご時世だろう。銀座だけではなかった。

冬の風物詩、ペンギンウォーキングを初めて見た。コースの沿道は競争率激しく、15分前から陣取ってお出ましを待つ。なんだか天皇陛下のパレードのようでおかしい。でもそれに応えてペンギン君、ちゃんと燕尾服でエッチラオッチラお出ましになった。ある者は立ち止まって沿道をにらんだり愛想たっぷりだったり。あまりの愛らしさにヤーニス君も思わず破顔。

午後は大使一行と合流して東川町議会で大使の挨拶を見学。町議会の議場など見たことがないので期待濃厚、立派だった。今夏、大使の故郷ルーイヤナ町と東川町が正式に姉妹都市になる。東川町は16年前からラトビアの学校に文房具などを援助している。松岡市郎町長はその立役者で、井下氏と共に地方から外交の人的交流を実現している。

旧知の北海道新聞OB曰く、北海道には活力ある自治体が多いという。素朴だが充実した身の丈に合ったパワーを発揮することが要諦。農業などは地べたに軸足があるので、工業、港湾よりも揺れにくい。土地は逃げないから根強いのだそうだ。

東川町も農業に加えて「写真の町」をテーマにした町おこしが20年以上続いている。青少年のための「写真甲子園」は有名だ。ラトビア交流のきっかけでもある。

さて、町議会訪問後もスケジュールがビッシリ。陶芸ギャラリー「ZEN」、日本画「後藤澄男展覧会」、旭川クリスタルホール「神々の遊ぶ音楽界」鑑賞などが終ったのは午後8時。それから雪道をぶっ飛ばして旭岳温泉、ホテルベアモントに。最後の晩餐が待っていた。地元牧場の羊のステーキと魚介類中心のバイキングは芳醇を極め、またしても一同盛り上がる。

そしてフィニッシュは掛け流し、横堀り温泉。雪の壁が露天風呂に迫る。沸き立つ湯気と天然の雪は幽玄の世界だった。

2日間行動を共にした山本スウェーデン名誉領事はマラッカ海峡で海賊と対峙した怪腕で知られる徳望家。ご夫妻の機知に富んだ会話は痛快無比で、旅をこの上なく楽しいものにしてくださった。

1泊の予定が、大使歓待のご相伴にあずかり、ありがたいオマケたっぷりの素敵な旅になった。

レセプションの幕開けは華やかな鏡割り

式典で祝辞を述べる松岡・東川町町長

大使館のオルロフス・オレグさん結婚

お相手は日本人才媛、田中　愛子さん

4月27日　東京青山のセントグレース大聖堂で

ラトビア大使の秘書官でお馴染みのオルロフス・オレグさん（27歳）が4月27日、東京青山のセントグレース大聖堂で結婚式（人前結婚式）を挙げた。お相手の田中愛子さん（26歳）は大妻女子高、日本女子大学教育学部出身の才媛で、ピアノ、水泳、クラリネット、けん玉を得意とする明るく活発な美しいお嬢さん。趣味は映画鑑賞。現在は学校の先生。

2人の出会いは02年8月、愛子さん一家がバルト旅行をした時、オレグさんがラトビアでガイドしたのがなれ初め。その年の11月から交際が始まり、07年にプロポーズ。今年になって、二人の母親の誕生日である3月25日に入籍した。

式、披露宴には内外の友人・知人75名が出席、乾杯の音頭をとったヴァイヴァルス大使は、いつもと違ってやや緊張気味に「今日はオレグと愛子の新しい家族の誕生日。お互いの人生に協力し合う新しい義務が生まれた日。二人は喜び悲しみを分かち合い、本当の愛を学ぶために一生勉強しなければならない。二人の新鮮な日々を暖かく見守りたい」と祝辞を述べた。

オレグさんはリガ日本語初等学校で日本語を学び山梨県甲陵高校に留学、ラトビア国立大学で国際関係論を専攻、この間、一橋大に1年間留学した。PAREX銀行日本支社を経て外務省入り、日本に大使館が設置されると同時に大使館勤務となった。

趣味はサイクリング・陸上競技。

4月16日にはラトビア語教室有志もお祝いのパーティーを開いた。

ラトビアの友　A・パブリックス前黒帯外相

前駐スウェーデン兼ラトビア大使
大塚清一郎

40年余の外交官生活で内外に色々な友人に恵まれたが、「生涯の友」と呼べる親友は指折り数えても少ない。ラトヴィアのアーティス・パブリックス前外相は、私にとりそのような友である。

鮮烈な初対面

着任後の初体面が鮮烈であった。大統領に信任状を奉呈した後の外務大臣への表敬だから、会話の出だしは定石通り、日本とラトヴィアの二国関係から始まったが、会話はひと段落した途端、共通の趣味の空手の話になった。

「ところで、オオツカ大使は何流の空手ですか？」

「私は松涛館流です。大学時代に4年間やりましてね。初段ですが、最近は全く練習していませんから、実力はブラックベルトではなく、私の髪と同じグレイベルトですな、ハハハ!ところで大臣は何流ですか?」

「7年前にニューヨークでシンジンブカンの空手に出会い、本格的に練習を始めました。沖縄のオナガ先生が師匠です。今はブラウンベルトですが、もうすぐ黒帯のための昇段試験があります」

オナガ先生というのはどういう人物なのか、私にはその時は知る由もなかったが、『神人武館、翁長良光先生』に対する外相の敬慕の情は、その話ぶりからひしひしと伝わってくる。武道の師に対する弟子の真摯な言葉を聞いて、私は久方ぶりにとても清々しい思いであった。

「武士道に心惹かれるのです。神人武館は日本の文化や伝統をとても良く体現していると思います」

「大臣にとって空手とは何ですか？」

しばし黙考後、彼は答えた。

「空手は、私の人生の行く手の暗い道を照らしてくれるロウソクの光のようなものです」

外相の空手に対する情熱は尋常ではない。

「それでは,そのうち機会があれば、お手合わせを願いたいものです」

私はその場の「外交辞令」で、「お手合わせ」と言ったに過ぎないのだが、しばらくして、本当の「お手合わせ」にまで発展してしまったのにはいささか驚いた。パブリックス外相はその後、黒帯を取得し、更に翁長先生から三段を授与された。

実現した空手の練習

リガ湾を望むパブリックス外相の私邸に招待された時の出来事。

白鳥が優雅に泳ぐ海辺の瀟洒な私邸に久保公使と共に赴くと、開口一番、「では、早速空手の練習をしましょう」ときたのには驚いた。案内された広い庭の一角には、数本の大きな松の木の間に、成る程、空手の練習用のマキワラ（突きを練習するための道具立て）が立ててある。結構練習していると見えて、マキワラの上部には拳から出た血がこびりついている。私は、上着を脱いでマキワラの前に前屈姿勢で構え、手始めに正拳を30発ほど突く。久し振りの練習だ。板に巻いた布に右手の握り拳をドスン、ドスンと力一杯ぶつける。なかなか気持ちが良い。還暦をとうに過ぎた老人にしては上出来である。腰の捻りも結構決っている。シャツに汗が滲み始める。

「流石ブラックベルト！イチさんは腰が決っていますね。今度は私の番です」

入れ替わりにアーティスが同じく正拳を突く。腰の決め方が少々甘い。引き手も不十分だ。私は早速身振り手振りで「もっと腰の捻り方を鋭く」などと師匠気取りで教える。本当は、教えられる柄ではないのに一寸無理して教えている。

「今度機会があれば、ちゃんと空手道着を着てドージョーで練習しましょう」とアーティス。いやはや、話は段々エスカレートしてくる。それにしてもアーティスは熱心だ。こんな空手黒帯の知日派の友人がラトヴィアの外務大臣であることは誠に心強い限りである。

昼食会では、安保理改革などの仕事の話もした。安保理改革の動きが大きな流れになった一昨年、ラトヴィア政府は、パブリックス外相の肝入りで、いの一番で、日本の常任理事国入り支持を表明し、G4決議案支持を打ち出してくれた。その後も日本支持の姿勢は終始一貫している。昼食会での話題は日本の武道の話に戻る。

「最近、宮本武蔵の『五輪書』を読みましたが、あれは興味深いですね。イチさんは読みましたか」

「いや、私は拾い読みをした程度で、本当に読んだわけではありません」

「吉川英治の書いた『宮本武蔵』は長編でしたが、これも面白かったですね」

「ほーう、私は残念ながら読んでいませんね」

「今度は『源氏物語』を読みたいと思っています。

「ほーう、熱心ですね」

段々形勢我に不利な展開になってきた。

「ところで、『武士の情け』とはどういうことでしょうか？」

私はもうたじたじという感じである。少々うろたえながらも、上杉謙信の塩の話をする。話のついでに「もののあわれ」について口にすると大変興味を示し、「ワビやサビとはどう違うのですか?」と鋭い質問がきた。今頃はきっと本居宣長をひもといて読んでいるのではなかろうか。それにしても、こんな親日家の外相がいてくれるのは日本·ラトヴィア関係にとり実に有り難いことである。

天皇皇后両陛下のご訪問

2006年2月のパブリックス外相の初めての訪日（外務省賓客）、4月の在日ラトビア大使館開設、カルヴィーティス首相の訪日などの重要行事が続き、日本・ラトヴィア関係は急速な広がりを見せた。2007年5月の天皇皇后両陛下のバルト三国ご訪問の一環としてのラトヴィアご訪問は正に日本・ラトヴィア関係に「新時代の幕開け」をもたらす歴史的ご訪問であった。ご訪問の計画を始めて直接パブリックス外相に伝えた時の同外相の「喜びの顔」は形容し難いものであった。パブリックス外相と電話やメールで緊密な連絡を取りながら、ご訪問のための念入りな準備を進めた。

ご訪問も近づいた5月のある日、アーティスから電話がかってきた。

「天皇皇后両陛下のご訪問を記念して、訪問の前日にリガの公園に日本の桜を植樹するというアイデアはどうだろうか？」

私は即答で賛意を表し、話はとんとん拍子で進んだ。

桜にちなんだ和歌を銘板に刻みたいが、どんな和歌が良いだろうか?」

アーティスは日本文学の専門家にも相談したらしく、西行の和歌を含め幾つかの候補の和歌を集めていた。あれこれ検討した後、「貴方が気に入った和歌を選んだら良いでしょう」と私は提案した。数日の熟考の後、彼が選んだ和歌は、紀友則の春の歌であった。

ひさかたの
　光のどけき春の日に
　　しず心なく花の散るらむ

ラトビア外相と空手の練習に打込む筆者

晴天の5月24日の午後、パブリックス外相とヴィンディーズ夫人と私達夫妻で桜の苗木二本を少年少女合唱団の美しいコーラスを背景にリガ市中心部の公園の一角に植樹した。毎年新しく苗木を植えて本数を増やし、ゆくゆくは「桜通り」にしたい計画だという。日本とラトヴィアの「友好の絆」として年毎に美しい花を咲かせてくれることであろう。

5月25日、いよいよ両陛下のラトヴィアご訪問の日。爛漫のラトヴィアの春の日であった。ご到着後、歓迎式典の盛大な午餐会がブラックヘッド·ギルドで開かれた。フレイヴェルガ大統領は、スピーチの中で、両陛下のラトヴィアご訪問を心から歓迎し、日本·ラトヴィア関係の歴史を回顧した上で、「両陛下の歴史的ご訪問は、丁度、ラトヴィアで桜が咲く季節に実現しました。両国関係が今後、桜の花が開花するように発展することを心から希望します」と述べられた。これに答えて、天皇陛下は、ラトヴィアの人々が苦難の歴史に触れられ、「ラトヴィアの人々が苦しい時代を通じ、勇気と誇りをもって困難に立ち向かってきた歴史を私共は忘れてはならないと思います」と述べられた上で、「1991年、バルト三国が旧ソ連邦の中から初めての独立国となったとの報せを受け、歴史の大きな流れに深い感慨を覚えたことを思い起こします。以来15年余り、欧州の一員として、民主化と経済、社会の発展の道を着実に歩んでいる貴国の人々の英知と努力に心からの敬意を表したく思います」と結ばれた。

ラトヴィアの苦難の歴史については、同席のラトヴィアの客人達はことごとく生きた証人である。私は臨席のパブリックス外相に思い切って尋ねてみた。

「ところで、あの1989年8月23日の『人間の鎖の日』に貴方は何処で何をしていたか、覚えていますか?」

「人間の鎖の日」とは、バルト三国の有志200万人が独立回復を目指して、手に手をつないでタリン（エストニアの首都）からリガへ、そしてヴィリニウス（リストニアの首都）へ600キロメートルに渡って「人間

（次ページへ続く）

ラトビアの友　黒帯外相

（前ページより続く）

の鎖」を作り、世界に向けて強い意志表示をした記念日のことである。

「あの日は、バルト三国の歴史にとり大きな意義のある日でした。私はリガの自由の記念碑の近くで友人達と手を組み、愛国の歌を歌っていました。ソ連からの独立、祖国の自由と民主主義を勝ち取るための止むにやまれぬ思いからの行動でした」

あの日から、独立回復に向けて歴史の車輪は大きく回転し始め、誰もこの動きを止めることは出来なかった。そして、1991年8月24日、ソ連はついにバルト三国の独立を認めるに至ったのである。

私はパブリックス外相に言った。

「ところで皇后陛下はバルト三国の独立の際、一首の和歌を詠んでおられます」

「実は、私も最近までそのことを知りませんでしたが、今回のご訪問の準備で色々と勉強して分かったことです。

秋空を鳥渡るなり
　リトアニア、ラトビア、
　　エストニア　今日独立す

私の言葉にじっと耳を傾けていたパブリックス外相が感激も面持ちで言った。

「これは実に素晴らしい話です。広くラトヴィア国民に知って貰いたいので、早速ラトヴィア語訳を作成することにしましょう」

午餐会は和やかな雰囲気の中に終了した。翌朝、リトアニアに赴かれる両陛下をリガ空港で一緒にお見送りした後、パブリックス外相は感慨深げな表情で私に握手を求めて言った。

「素晴らしいご訪問でした。このような歴史的ご訪問を貴大使と共に仕事が出来たことは実に嬉しいことです」

黒帯外相の端正な顔に満足げな微笑が浮かんでいた。私自身も、このような素晴らしいラトヴィアの友を得られた喜びをじっと噛みしめていた。特別機はゆっくりとリガ空港を飛び立って行った。

※本稿は外務省の許可を得て、霞関会月報741号から転載しました。（編集部）

◇

（編集部註）シンギング大使としても知られた音楽好きの大塚氏について、日本経済新聞3月24日付「交遊抄」に羽山定克スウェーデンハウス会長が、「音楽が懸け橋」と題して、大塚氏がスウェーデン大使時代に、自分の車にいつもギターを積み込み、パーティーで弾き語りでスウェーデンの歌などを披露するなど、歌でも日瑞親善に貢献した話などを詳しく披露している。

08年当協会ビッグ・プロジェクト第二弾！「歌と踊りの祭典」視察旅行に50名参加

（7月9日～18日）

現地でラトビア人と積極的に交流。ビリニュス（リトアニア）、ウイーンの文化にも触れる。

歌の祭典

踊りの祭典

ラトビアで歌を意味する「DZIESMA」は「生きる」「生まれる」の派生語です。ラトビア人が「歌の民」といわれる所以でもあります。私達は、ラトビア人の誇りと名誉の精神的なバックボーンでもある、国を挙げての「ラトビア民族歌と踊りの祭典」を視察することによって、ラトビア人に対する理解を深め末長い交流をしたいとの思いから、藤井威会長を団長として50名（5月26日現在）からなる旅行団を結成しました。

日程は、7月9日成田発、ヘルシンキを経て同日夕刻リーガに入ります。10日夕刻、日本大使館に於いて大使館と共催によるレセプション開催、約50名のラトビア人を招待します。今現地側と連絡を取りながら招待者リストを作成中です。リーガ市内観光には、山本徳行顧問から提案された、同氏がお世話した日本留学経験者たちに一部ガイドをして頂くことを検討中で、出来るだけ現地の人々との交流や接触の機会を多くしたいと考えています。旅行団は歌の祭典を視察した翌日13日に、リーガからウイーン経由16日に帰国するグループ（A）と、ビリニュス（リトアニア）とウイーンを訪れ18日に帰国するグループ（B）の2つに分かれます。ウイーンでは夫々のグループとも旅行者が定めたツアーのほかに、希望者に対しては在ウイーン十数年、今も当地で執筆活動をされているウイーンメロス音楽研究所代表の野村三郎先生（当協会会員）夫妻ご好意による美術史美術館又はベルヴェデーレ美術館見学、ショッピング等のプランも検討しています。野村先生は早稲田大学大学院博士課程修了、ウイーン大学、ウイーン国立音楽大学留学。霧島国際音楽祭創設者。東邦音楽大学教授、九州大学客員教授等を歴任。著書に［ウイーンフィルハーモニー」（中央公論新社刊）などがあり、ウイーン紹介の第一人者としても知られています。

◇

今年の祭典には、コーラス13,000人、踊り15,000人、その他を合わせて35,000人が参加します。また今年はラトビアが最初に独立宣言した1918年から90周年目に当たる年で、同国ではその記念行事も企画されているようですが、歌の祭典には海外在住のラトビア人をはじめ世界各地から多数の旅行者たちがこれまで以上に集まってきます。祭典の主要な催しもののチケットは発売開始後わずか2時間で完売とのことです。

民族衣装で着飾る少女たち

藤井会長が昨年、ご自身が撮影された写真で作られたカレンダーの7月に、「ラトビア歌と踊りの祭典」について次の様に述べられていました。「ラトヴィアがロシア帝政の支配下にあった1873年、全土の合唱隊を集めて第1回祭典が開かれた。この祭典は、近年は5年毎に開催され、長期にわたって他国の支配下にあったラトヴィアの人々の民族意識を刺激し、次第に独立への願いを強めていったという。戦後ソ連の統治下でも種々の制約の下でほそぼそと続いた。1991年独立後はこの祭典は、民族の自由と独立の喜びを爆発させる場となっている」。

旅行の思い出は現地での天候に左右されます。当日は好天に恵まれることを期待しています。（加藤晴生）

※写真は藤井威会長撮影

参加者

Bコース

（リガ～ビリニュス～ウィーン）

藤井　威（東京・会長・団長）

加藤晴生（千葉・専務理事・副団長）

[以下受付順]

清水卓爾（東京）、清水ヨウ子（同）、藤井明子（東京・会長夫人）、小川翠（東京）、飯塚美沙子（神奈川）、多賀清雄（長野）、多賀さゆみ（同）、池田　泰（東京）、福島一世（神奈川）、浅妻　勲（東京）、浅妻祥江（同）、佐藤彰男（千葉）、佐藤祐子（同）、三巻義夫（神奈川）、三巻道子（同）、遠藤守正（神奈川）、工藤悠一郎（東京）、鈴木紘輝（東京）、白井　猛（東京）、白井多摩子（同）、加藤民子（千葉・専務理事夫人）、高仲和子（東京）、桜井珊子（東京）、堀口大樹（東京）、長岡喜美子（東京）、小林雅子（同）、落合直道（千葉）、岡安弘二（東京）、岡安陽子（同）、植木佐代（東京）、支子岐子（神奈川）、内山守太（千葉）

Aコース

（リガ～ウィーン）

[受付順]

山本徳行（福岡）、山本弥生（同）、赤池喜代（徳島）、西尾千春（同）、熊谷敬子（東京・前会長夫人）、顕原信二郎（東京）、顕原和代（同）、金岡　隆（神奈川）、関口教和（東京）、関口トシ子（同）、服部圭以（東京）、福山佳永子（同）、佐々木憲元（青森）、中嶋勝彦（東京）、椎野寿子（徳島）

跪礼とヨーロッパ文化

元駐ラトビア日本国大使館臨時代理大使
田中 享

ラトビアには若い女性が跪礼（英語“Curtesy”、ラトビア語“Kniksis̄”）という挨拶をする習慣が残っている。当会会員松原千振氏に伺うと、これはフィンランドでも残っているという。きっとほかのヨーロッパ各地にも残っているに違いない。跪礼とは女性が膝まついて礼を行う挨拶であり、かつてヨーロッパの貴族社会で広く行われていたエレガントな挨拶の仕方である。現在は欧州の王室の間やバレリーナが挨拶として行うに過ぎない。しかしながらこの跪礼を通して18世紀のヨーロッパが覗けるような気がしている。

吉田健一氏の著「ヨーロッパの世紀末」を紐解きながら当時のヨーロッパはどんな社会であったかみてみたい。同氏はヨーロッパは18世紀にその黄金期の絶頂に達し、それはルイ14世で始まりモーツアルトで完成されたという。ルイ14世は絶対王政の最盛期を現出し、ヴェルサイユ宮殿はその極致であった。その貴族文化の華麗さは瞬く間に模範となりヨーロッパ中に広まった。それまで貴族が出世するためには戦場で蕃勇を示すことが必要だったが、ヴェルサイユ宮殿ができてからは宮廷でいかにエンレガントな礼儀作法が出来るかどうかということに一変したのである。

その後18世紀を通じて音楽・文芸は一層成熟し、バッハ、百科全書派、ルソー、モンテスキュー、ギボン、ゲーテなど数多の天才偉人を輩出して一大黄金時代を現出した。新たなヨーロッパの知的伝統と教養主義の始まりである。モーツアルトはこのようなヨーロッパがヨーロッパとしての性格を完成した絢爛なる18世紀の時代精神と文化を離れて存在しないといわれる。モーツアルトはヨーロッパを自由に駆け回り独仏伊の音楽の長所を合わせた音楽を完成した。吉田健一氏はいう。

「モーツアルトの稀代の音楽は時代、場所、人を超えた普遍的な魅力があるとされるが、モーツアルトの音楽は18世紀のものであって他方18世紀を思い浮かべればモーツアルトがいる。モーツアルトの音楽の完璧さにヨーロッパの完成を見ることができる」。

いま一つこの時代を象徴する逸話がある。1740 - 1748年の間、女帝マリア・テレジアがハプスブルグ家の全領土を継承するとオーストリア王位継承戦争が起こった。このときフォントノアで英仏の近衛連隊が遭遇すると、両軍の司令官は騎士道に従って、互いに相手に先を譲りあい相手が先に発砲することを勧めた。何度かやりあった後、英軍が「ではお先に失礼」といって発砲すると仏軍の第一線はほとんど全滅した。激しい戦闘のあと仏軍が勝利したが、大切なことは双方の負傷者は同じ村で一緒に看護をうけたということだ。これは当時の騎士道精神、礼儀、エレガンス、人間の尊厳への敬意、また国際性というものがいかに大切にされていたかということを示す話として有名である。吉田健一氏はこのように18世紀こそヨーロッパが最高の文化の水準に達していたと絶賛する。

跪礼の練習風景：英国

しかしながら古き良き18世紀も1789年フランス革命が勃発すると終焉する。その後はナポレオンによる果てしなき戦争が続き人心を荒廃させた19世紀が始まる。ベートーベンが道でオーストリア皇后と出会ったとき丁寧に会釈する皇后に振り向きもしなかったのは18世紀ヨーロッパの瓦解のきざしであったという。

現在でもヨーロッパ人の心には、エレガンスを尊び栄光につつまれた古き良き時代のヨーロッパを懐かしむ気持ちが残っている。これがヨーロッパの真の姿であり本音であろう。跪礼を見られた時には、かつてヨーロッパが燦然と輝いていた時代についても想いを馳せて頂ければ有り難い。

リーガの街の猫達

白石 仁章
外務省大臣官房外交史資料館

リーガの街を歩いていて、日本とラトヴィアの思わぬ共通点を見つけることがあったことについて、以前この連載の中で書いたが（第9号「女心とバルトの空」）、今回は逆に極端に違っていると感じた点について書いてみたい。

黒沢歩氏のご著書『ラトヴィアの蒼い風』（株式会社新評論、2007年）のことを本会報で知り、早速拝読させて頂いたが、ほんの数日立ち寄った筆者のような者とは違い、現地に住んでいらっしゃるからこそという様々な視点を感じ、大変興味深く読ませて頂いた。

そして同書の中で思わず「やはり」と思ったことが、猫のことであった。同書では、全3章のうち第2章が「猫のいる風景」となっており、リーガの人々がいかにペットを家族同然に愛し、その中でも猫を非常にかわいがっており、また野良猫諸君にも餌を与える優しい人達が大勢いる様子が生き生きと描かれている。大の猫好きで道端で猫を見かけると話しかける、そして猫諸君さえ許してくれれば思わず撫でたくなる程の猫好きにとって、読んでいて楽しい限りであった。

リーガの猫はとても人懐っこい

他方、最近東京の猫諸君は人間への「警戒心」が大変強くなってしまったのか、なかなかそばに寄らせてもくれず、すぐに逃げられてしまうことが多い。

ところが、2002年9月にプライヴェートな一人旅でリーガの街を訪れた際に、秋の日差しを受けながら街のそこかしこで、のんびり過ごしている猫諸君に出会え、近寄っても逃げない、平気で写真を撮らせてくれる、そして平気で撫でさせてくれることが嬉しかった。変な日本人が盛んに猫に話しかけ（それも日本語で）、撫でまわし、写真を撮っている姿は、リーガの人々の目にはいささか奇異に映ったのではなかろうか。

それにしても、猫諸君の無警戒振りは東京とは好対照なので、リーガの人々は彼らに優しいに違いないと思っていたところ、黒沢氏の著書に出会い「やはり」と思ったしだいだ。「日本の野良猫のように、人を見て逃げ去ることはありません。それどころか、小走りに寄ってきては足元に背中をなすりつけたり、目の前にねっ転がり、腹を見せたりして喉をゴロゴロと鳴らしています」（同書136頁）という一文は、リーガの猫諸君と実際に出会った者にはそれが少しも誇張でないことがよくわかる。次にリーガを訪れる機会にもまたあの猫諸君と戯れたいものだ。

ところで、リーガの人々は猫だけではなく、妊婦さんや子連れの人にも大変優しいという印象も受けた。そう、まさに母親が穏やかな表情で子供との時間を楽しんでいる姿をしばし見かけ、何とも言えず心温まる風景だと思った。その後結婚し、家内が妊娠し、現在3歳になる娘をここまで育ててきてしみじみ痛感したことだが、リーガの人々に比べ、東京の人達は妊婦さんや子連れの人に対する優しさに欠けることが多いように思われる。優しくする余裕がないのかもしれないが、そういう環境で子育てをすることは正直大変だ。ある時、家内がママ友達との会話で「私たち悪いことをしているわけではないのに、毎日謝ってばかりいるね」という話をしたと聞いた時、日本は子育て途上の人々への優しさが少ない、何て精神的に貧しい国であろうかと悲しい気持ちがした。東京が猫諸君にも、妊婦さん達にも、そして子供達にとっても優しい街になることを願いたいい。昨今日本では「少子化対策」が話題になっているが、解決の大切なヒントが案外リーガにもあるのではないだろうか？

（追）私は現在東京国際大学（旧国際商科大学・川越市）で非常勤講師を勤め「日本・ヨーロッパ関係、「日本・ロシア関係」を講義しています。毎年ロシアとの関係の深い東欧諸国の紹介をし、ラトヴィアも私が訪れた際の写真を見せて紹介しています。全然知識のなかった学生諸君が、リーガの街の美しさに感嘆し、興味をもってくれるのが楽しみです。

来たる合唱祭に向けて

ラトヴィア／リーガ在住
黒澤　歩

ラトヴィアの「山」

無いものに憧れるのはだれしもおなじことでしょう。少なくとも日本人が「山」と呼ぶような山がないラトヴィア（国土の最高地点が312メートルたらずで、リーガのテレビ塔より低い）では、「山」のつく地名や単語をよく耳にします。「キツツキの山」や「山の村」という地名に、「カルンス（山）」や「カルニンシュ（小山）」という苗字などです。

山は、ラトヴィアでは地理的な概念にとどまりません。何かしら特別な催しを、「山」に結びつける節があります。例えば、はるか昔に開催された写真家の集いはその場所だけでなく集いそのものを「写真の山」と名付けましたし、およそ100年前に収集された膨大な数の民謡をモチーフに作られた彫刻の公園は「民謡の山」と呼ばれています。そして、2008年はラトヴィアに「歌の山」が出現することいなっています。それは5年に一度の大合唱祭のことを指します。

「歌の山」の下ごしらえは、楽譜を2年前に発行するなど、今回は用意周到に勧められてきました。毎週日曜日夜の国営テレビのニュースでは、各地の準備の様子を撮影し、「合唱祭まであと○○日」とロゴが出ます。

想定外のチケット騒動

周到に準備し、合唱祭ホームページではチケット販売情報も、購入自体も滞りなく行われるはずであったのに、実際の発売開始日はその日のトップニュースとなったほどの混乱でした。

まず、ホームページが発売開始10時10分にはすでにアクセス過多で対応不能となったこと。では、各地の販売窓口に出かけてみると大変な行列で、私はなんと4時間も待たされても、予定のチケットは入手できませんでした。目玉のコンサートのチケットは発売開始2時間ですべて売り切れていたのです。でも、そういう事実がわかったのは午後のニュースを見てからです。一般人はなんの情報もなくただひたすら待たされて苛つく行列に並んでいるしかなかったのです。

今回のようなことは、かつてなかったことです。私も1993年からもう4回目の合唱祭を迎えますが、これまでならチケットは当日会場入り口でいとも簡単に買えたものでした。今年は、バルト三国の建国90周年と合唱祭の記念すべき年であるためか、メディアの宣伝はいつにも増して盛んでした。それに外国人向けの大宣伝もあって、売れる商品と化した民族文化に目をつけ、普段、音楽の「お」の字も知らないような人々がダフ屋となって大量のチケットを抑えたのも、混乱の一因だそうです。合唱祭を組織する民族芸能協会は、「一人当たりの購入可能なチケット枚数に制限を設けなかったのは誤りだった」と認めています。

欠かせない三曲

なにはともあれ、今年7月5日の大パレードから始まる見えない歌の山は、12日の夜更けにそびえたつはずです。合唱祭で歌われるのは民謡だけでなく歌謡曲や現代曲、外国の曲もあります。特に1980年代の日本で言うところの「青春ポップス」はソ連からの独立を導いた精神的な支柱となっていたことは、ラトヴィア人がこれらの歌を特別の感慨を込めて歌う様子に読み取れます。また、「歌わなければ合唱祭が終わらない、家に帰れない」歌が少なくとも三曲はあります。（以下、歌詞意訳）それはまず、「我が祖国に（Manai dzimtenei）」（曲：ライモンズ・パウルス、詩：ヤーニス・ペテルス）です。ソ連時代も終わりに作られた一曲です。

◇

愛しいダウガワ河が教えてくれたこと―流るる運命がごとく、歌が歌祭りを祝い若者たちを目覚めさせた。そして運命に立ち向かって若者が歌う歌は何百年も永遠に色あせない。

5年目がやってくると血の雨が降り、いちばん高い松の木をへし折っていく。立ち向かおう、歌の嵐を巻き起こして。光の城の山で歌いつづけよう。

かすかな声が大地にはるかそよぐ。歌が歌祭りを祝い、若者たちを目覚めさせた。いつまでも流れるダウガワ河と若者が歌う歌は何百年も永遠に色あせない。

へし折られた松は我らの心に生えつづけ、足取り新たに我らが新たな朝を呼ぶ。さあ永遠に歌いながら歩もう。光の城の山でいつまでも歌おう！

◇

合唱祭の習わしでは、この歌に続いて「光の城（Gaismas pils）」（曲：ヤーゼップス・ヴィートールス、詩：アウセクリス）という荘厳なアカペラの曲が、歌詞を引き継ぐかのように歌われます。ラトヴィアという国がまだなかった時代の19世紀末に書かれたこの歌は、ラトヴィア人が、自らの存在を維持するためにどれほど肩肘を張ってこなければならなかった民族であるかを示すようです。

◇

クルゼメよ、神の大地よ、自由の民の守り手よ、年老いた神々はいずこに消えた、自由の民の息子たちは

彼らは古い時代の光の城で揺れている、もみの木の森の真ん中に明るくそびえる光の城で

父なる大地に血が流れる日が昇った。民族はつながれ、英雄たちは死んだ

みるみるうちに溺れ消え去った光の山にそびえる城。そこに眠るは我らが神々、民族の精神の財宝なり

古い樫の木々が最後の一輪を咲かす。聖なる呪文を隠すは心の奥底の傷

呪文を解けば城は蘇る、民族の栄誉をはるか響かせ、光輝いて

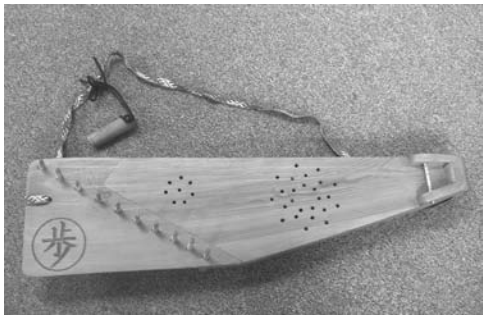
息子たちは忘れ去られた神聖なる呪文を解き明かした。叫ぶと昇る光。光の城が蘇った

◇

この歌が響く頃、目に見えない大きな山をラトヴィア人たちはそれぞれの心で見ている。そして、祭典の締めくくりに指揮者もなく沸き起こる民謡「風よ、吹け」。今年は、歌い続けたい人はだれでも朝方まで森林公園の残っていていいそうです。さて、5年に一度の歌の山がそびえるのもいよいよです！

民族楽器 コークレ（Kokle）のこと

美しい音を奏でるコークレは木製のフラットな弦楽器ですが 、弦の数は8本から31本までさまざまです。昔は男の演奏する楽器だったといわれていますが、現在では女性が清らかに歌いながら弾くことが多くなりました。それでも、コーコレのソロ奏者であるラトヴィア大学レトニアセンターのムクトパーヴェル教授（男性）は、自作品を独演するCDも出しています。



コンサート専用のコークレを作る職人はラトヴィアにたった一人、イマンツ・ローベジュニエクス氏のみと言われ、今技術の伝達に力を注いでいるそうです。氏は、合唱祭恒例のコークレ演奏会のために注文をこなすのにおおわらわだそうです。そのほかに、民俗芸能関係者の中には個人のコークレ作成者も複数います。コークレを個人でお求めになりたい場合には、旧市街のワーグナー通りにあるラトヴィア音楽と雑貨の店ウペ（UPE、ラトヴィア音楽CDのレーベル）なら、数台は小ぶりなものが置かれています。

合唱祭参加の選抜

5月8日、合唱コンクールが終わり、ラトヴィア国内から合唱祭に参加する394の合唱団が選ばれました。リーガでは、国内の男声合唱団が一同に集まりました。合唱祭の運営を取り仕切るのは、文化省管轄の「民族芸能センター」です。合唱コンクールで選ばれた合唱団の中からは、さらに今後の選抜があり、合唱祭期間中に135年来の伝統である（今回は7月8日）「合唱団戦」に参加する資格を得ます。

この選抜の準決勝は、合唱祭までひと月を切る5月30日から6月8日までの間に公開で開催されます。この期間中に、5月31日にラトガレ地方のレーゼクネから始まり、6月1日にクルゼメ地方のクルディーガ 、6月7日にはゼムガレ地方のイエルガワ、6月8日にはヴィッゼメ地方のヴァルミエラにて、各地方毎に開催されます。リーガの合唱団は、6月2日から6日までラトヴィア大学の本講堂とラトヴィア人協会会館にてその成果を競い合います。

ガルータの音楽は私の生涯のレパートリー「今秋、ラトビアで歌曲集をレコーディングします」。

河西　麻希（サクソフォニスト）

2007年2月第5回国際サクソフォンフェスティバル「サクソフォニア」がラトビアで開催されました。私は日本人として初めて招聘され、2月10日、ラトビアに降り立ちました。リガ空港に到着したのは深夜だったのですが、とても温かく迎えてくださいました。私にとって初のラトビアでした。

2月13日、リガの聖ヤーニス教会で行われたフェスティバルのオープニングコンサートに出演し、この日の為に書かれたR・ドゥブラ作曲のオラトリオを演奏しました。編成はユニークで、2つのサクソフォンカルテット、パイプオルガン、合唱（国立合唱団ラトヴィヤ）、打楽器、そして私はソリストとして参加させて頂きました。悲しみや幸せを併せ持ち、荘厳で神々しい光が降ってくるような曲で、失神してしまいそうなほど感動したのを今でも思い出します。（幸運なことに、今年9月にリガ大聖堂で行われる「国際宗教音楽祭」に出演し、このオラトリオを再演することとなりました。）

2月14日からは、連日ソロリサイタルというスケジュールでした。ここで驚いたのが、私のように各国から集まったサクソフォニストが同じ日程で、リガだけでなく小さな町や村までコンサート出演のために出掛けるのです。例えば私の場合、リガの歴史博物館、マサラツァの文化センター、グルベネの文化センター、イアツァヴァの教会といったように。そして小さな町でも沢山のお客様が来場されるのです。私はラトビアの人々の音楽への想いの深さを強く感じました。

帰国前日、私の大好きなラトビアの作曲家Lūcija Garuta（ルーツィア・ガルータ1902-1977）の姪の娘であるダイナさんが、ガルータの住んでいたアパートに連れて行ってくださいました。そこには、ガルータのピアノや出版されていない沢山の楽譜がありました。中でも一際目を引いたのは、青の表紙にシルバーの文字の書かれた、美しい装丁の歌曲集でした。それは愛した人を想って書いた曲や、別れ、つらい日々など、彼女の人生を垣間見ることのできるような曲集でした。私はますます彼女の音楽に感動しました。そしてその感動が忘れられず、今年9月にラトビアを訪れる際に、この歌曲集をサックスにアレンジしたものを中心にレコーディングすることになりました。ガルータの音楽は生涯私の大切なレパートリーになることでしょう。

最後に、ラトビア音楽と出会うきっかけを与えてくださり、今でも惜しまず私に力をかしてくださる、ゼメネ音楽企画・日本ガルータ協会の菊地康則さんに心から感謝致します。（「サクソフォニア」のレポートは河西麻希ホームページでも紹介しています。http://sound.jp/maki-sax/）

安藤史子さん（フルート）ラトビア音楽祭に参加

ゼメネ音楽企画・菊地　康則

2005年、私がゼメネ音楽企画として企画したコンサート「現代ラトビアの音楽」はラトビアのクラシック作品のみで構成する演奏会の試みとして、多くの人々の協力を得て実現しました。そしてこのコンサートに出演してくださったサックスの河西麻希さんは昨年2月に行われたサックス音楽祭「サクソフォニア」に招かれ、ラトビア・デビューを果たしました。

今年はさらにフルートの安藤史子さんが7月に行われるラトビアの合唱祭にゲスト出演者として招かれ、作曲家ライモンズ・パウルス氏主催のポップスコンサート（7月10日、ラトビア民謡のアレンジ作品で構成）に参加します。安藤さんがこれまでに発表したCDの演奏が評価されての抜擢となりました。彼女は私の演奏会でラトビアの無伴奏フルート作品3曲を演奏していますが、その中の「鳥たちのいる風景」の作曲者ペーテリス・ヴァスクス氏の提案により、ペーテリス教会で同時期に行われるチャリティーコンサートにも出演することになりました（7月8日）。

安藤史子さんは関西を中心に活躍する名手です（ホームページ：http://homepage2.nifty.com/flutef-ando/）。ユリス・カルルソンス・ラトビア音楽アカデミー前院長は、安藤さんが吹いたヴァスクスの曲は、前院長がそれまで聴いた演奏の中で最上のものである、と評しました。

このチャリティーコンサートはラトビア音楽アカデミーとペーテリス教会とのコラボレーションにより続いている、定例の企画だそうです。今回の曲目は私の提案を交えて安藤さんが構成したもので、ヴァスクス氏の作品をはじめ、平尾貴四男のソナチネ、タクタキシヴィリ（グルジア）のソナタなどが演奏される予定です。伴奏ピアニストはラトビア屈指の名手、ヘルタ・ハンセナさんです。

私たち家族も安藤さんとともにラトビアを旅します。合唱祭のイベントはもちろんのこと、ラトビアの友人たちとの再会が待ち遠しいです。また私たちが帰国したあと、サックスの河西麻希さんが9月初めにラトビアを再訪し、国際宗教音楽祭でリハルツ・ドゥブラの2つの作品に出演、さらに彼女自身の企画であるガルータのメロディーのみで構成する素晴らしいCD企画の録音をリガで行います。すっかりラトビアに魅せられてしまった河西さん、気迫に満ち満ちています。このように自分のイベントが価値ある創造行為のきっかけとなっていくことに、大きな喜びを感じます。私が2003年のガルータのカンタータ演奏会終了後に合唱参加者の皆さんに伝えた、「この演奏会は“始まり”であると思っています。」という言葉が、いま様々な思いがけない形で自分に返ってきているのです。

音楽一家に育った夫との出会い 素晴らしいラトビアの幼児教育

荻原　淑子（バイオリニスト）

私は日本で中学を卒業した後、ハンガリーのリスト音楽院に留学しました。ハンガリーは、その激しい歴史の中でヨーロッパ諸国から入ってきた音楽の影響と、土の香りのする自国独特の感性で自分の音楽を造る、個性豊かな音楽家であふれています。伝統を踏まえつつ自分自身の感性によって音楽を造り上げる、ということを私はハンガリーで学びました。音楽院卒業後は10年近くブダペストで演奏と指導の仕事をし、それからオーストリアのザルツブルグに移りました。世界中から愛されているオーストリアの音楽伝統に触れ、オーストリア・ハンガリー帝国の時代を経て、国境を共にしている二カ国間の感性や音楽に対する考え方はこれほど違うのか、と異なる伝統や文化の価値の大きさとそれを守っていく誇りを実感しました。そしてもう一つ、ハンガリーで仕事をしていた時と一番違った点は、仕事仲間がインターナショナルで、異なる芸術観を持った人々と交流できる機会が増えたことです。私がラトビアという国とご縁を持ったのも、当時オーケストラでコンサートマスターや指揮をしていたラトビア出身の主人と出会ったことがきっかけです。世界的に名を知られるラトビア出身の音楽家は多く、もちろんそのレベルの高さは知っていました。けれどもオペラ歌手そして演出家である父、かつて合唱団「アヴェソル」で歌い今でも子供に歌の指導をしている母、ロイヤルアカデミーで教授をしているピアニストの姉や主人の友人たちから話を聞いていて、その幼児教育の素晴らしさに感嘆させられました。そんなことがきっかけで、熱心な子どもが多い日本でヨーロッパのシステムを取り入れたヴァイオリンスクールを作れたら、と主人と2人で考えるようになり、2005年に「ヴァイオリンスクールAMADE」をオープン、それからは1年の半分以上を日本で過ごし、日本の演奏家たちと一緒に生徒の指導に当たっています。日本の子どもたちは本当に忙しく音楽に没頭するのは大変ですが、もしプロの演奏家にならなくても、自分の限界と闘ったり、難題を越えたりして初めて味わえる楽しさが将来役に立ってくると考え、それなりの厳しさをもって指導しています。ヨーロッパの英才教育の素晴らしさを取り入れ、かつ日本に適応した指導ができるスクールにしようと四苦八苦の毎日です。

女流作曲家ルーツィヤ・ガルータ(1902—1977)のこと

吉田 ラスマ

ピアニスト、教育者としても大きな足跡残す

作曲家ルーツィヤ·ガルータは20世紀ラトビアが生んだ最も偉大な女流作曲家の一人といわれています。彼女は作曲をラトビアの偉大な作曲家ヤーゼプス·ヴィートール教授に、ピアノをエル·ゴマネードンブロフスカに師事して研鑽を積みました。彼女は1924年か1925年にラトビア音楽院を卒業、当時作曲を学んでいたラトビア人の中ではパリで1年以上に亘ってアルフレッド·コルトー(1877—1962)、ポール·ディカやイジドール·フィリップ(1863—1958)といった錚々たる名匠から作曲を学んだ唯一の作曲家です。

彼女自身の音楽に最も影響を及ぼしたものとしてはフランス印象派音楽及びア·スクリャービン(1872—1915)の作品でしょう。彼女はフランスから帰国すると直ちにリーガの人民音楽院、現在のヤーゼプス·メディンシュ音楽カレッジで教鞭をとり、1947年までこの職にありました。1940年からは彼女はラトビア音学院で作曲の教鞭をとりました。

ルーツィヤ·ガルータが創作する曲はロマンティックであり国民音楽を象徴する最も精神的な曲の一つです。彼女の作品にはオペラの“The Silver Bird”、オラトリオの“Living Flame”、カンタータ、交響詩3曲、ピアノコンチェルト、交響変奏曲、交響組曲、ピアノトリオ、ピアノとオルガンのための曲等種々あります。

彼女はラトビア民謡の編曲に加え合唱曲及び独唱曲も作曲しています。彼女の才能はピアノ音楽と独唱曲の分野で遺憾なく発揮されており、例えば、“Sacred Love”、“Moon Boat”、“The Stars and Earth”その才能が表れていますが、何と言っても最も有名な曲はカンタータ“神よ、あなたの大地は燃えている”であり、この曲は詩人アンドレイス・エグリーティス(1912—2005)の詩に作曲されています。

この両人の音楽におけるお互の共同作業が始まったのは1943年です。この年クルデイガ教区管長のオー·サカルニスは詩と音楽は互いに愛国心の枠内でキリスト教徒の感情を表現すべく競い合うことに関する重要性、意義について声明を出しました。

このカンタータが持つ悲劇的な意味合いと重要性を十分理解するには作曲当時の時代的な背景を知っておく必要があります。

筆者近影

1943年はラトビア及びラトビア国民にとって非常に苦難に満ちた年でした。1940年6月のソビエト連邦の赤軍による瞬時にしてのラトビア占領後、ラトビアはソ連邦に併合されました。1940年6月14日はソビエト政権がラトビア人を初めてシベリア捕虜収容所に流刑した日で、ラトビア·ソビエト社会主義共和国の初年度の間に3万5千人以上ものラトビア人がソ連共産主義者により追放、流刑されました。

1941年7月1日、ドイツナチス軍隊がラトビアを占領したことで、ソビエト政権による新たな追放、流刑の処置は終結しました。ナチスの占領に関してはソ連邦のそれよりも若干ましであると考えられました。民間人を収容する強制収容所がサラスピルスに建設され、ラトビア在住のユダヤ人およびジプシーは無残にもナチスにより絶滅させられました。

ラトビア人の心の中にはソビエト連邦もナチスもラトビアが独立国であること、ラトビアの国家存続ということは紛れもない事実であるとの思いがありました。

このようにして歴史的な混乱の時期にラトビア人民の神への祈りを教会カンタータの形で捧げ、それを自国民の精神高揚のために国民に演奏して聴かせるという考えが生まれたのです。

詩人アンドレイス・エグリーティスの作詩によるカンタータ“Dievs, Tava zeme lag!”(“神よ、あなたの大地は燃えている”)はキリスト教の持つイメージとラトビア民謡の持つイメージとを合わせることで苦難の時代下での力強い祈りの歌としました。そしてこれが最高の曲であるとして全国民に受け入れられたのです。

1944年3月15日秀逸なる音楽家とルーツィヤ・ガルータの出演によるカンタータの最初の演奏会が開催されました。この曲に対する聴衆の全般的な反応は信じられないくらい素晴らしいもので、催眠術にかかったかのごとく興奮させられるものでした。人々はこの曲を聴くために再三再四来場し、そうした状況はソビエト連邦が二度目にリーガを占領したその時まで続きました。1944年、ラトビア領土はナチスとソビエト連邦とに分割され、ラトビア西部に侵攻した赤軍から逃れるべく多くのラトビア人が国外に退去しました。しかしながらこのカンタータの演奏会は引き続き開催され、沈黙して涙にむせんだ聴衆を集めたものでした。

1980年代の初め頃までガルータのカンタータのシートミュージックとレコード(記録)はソビエト連邦軍により滅失され、また演奏会やラジオ放送は禁止されたために永久に失われたものと信じられていました。しかしながら同じ頃西ドイツの放送局の公文書保管所でカンタータのラジオ放送記録レコードの幾枚かが見つかりました。このカンタータ曲はこれらのラジオ放送記録レコードより修復されて以来幾多の音楽家によって演奏されました。

ルーツィヤ・ガルータは占領下のラトビアに留まりラトビア音楽院で自らの作曲を続ける傍ら、学生を教授して1977年に他界しました。一方、詩人のアンドレイス・エグリーティスは西側に逃れることでソ連邦赤軍から避難した13万人のラトビア人民の群れに加わりました。そして1988年故国に帰国、2005年に他界しました。

L·ガルータ
(菊地康則氏提供)

このような背景から、作曲家ルーツィヤ・ガルータと詩人アンドレイス・エグリーティスの運命は軍隊によって切り裂かれたものの、一つの歌によって団結したラトビア国家そのものの運命を正に映し出したといえるでしょう。(翻訳:原 健之)

真夏の夜(夏至のお祭)

吉田 ラスマ

あらゆるラトビア人に語り掛ける国の祭典、それはジャニュイ(ジャニスの日)と呼ぶ真夏の夜のお祭だ。

ラトビアに住む人すべてを結束させる国の祭典、それはリゴの夕べだ。

海外に住むラトビア人が母国の祝いに参加したいと願う国の祭典、それは夏至のお祭だ。

私たちがラトビア人と意識する唯一のものを挙げるならば、それは太陽のお祝いだ。丘の上にみんなが集まり、大篝火を囲んで、6月23日の日没から翌日の日の出まで一年で最も短い夜を徹して火を絶やさず、歌を歌って太陽が戻ってくるのを助ける。切り立ての野花と木の枝で私たち自身と家々を飾り、母なる大自然の恵みのエネルギーをいただいて、来る一年の健康を増進させるのです。このようにして、私たちは夏至を祝っています。

実際に、人によってお祝いの仕方が違いますが、今年の夏のお祭には他の時にないおまけがあります。真夏の夜を祝うに相応しい最も大事なものとしてビールと出来立てのチーズがあります。最近まで多くの農家の人たちは地ビールを造っていたし、今も新鮮なチーズを作る芸術というべき作業は続けられています。もし6月23日にラトビアに滞在しているなら、スーパーマーケットに並ぶ缶ビールや真空包装のチーズには目もくれず、地元のマーケット、とりわけリガ中央マーケットを訪ねることをお奨めします。そこで、手づくりチーズと季節の美味を味わうことができます。帰りには野花の花束やオークの葉で作った花輪や花冠を手にしていることでしょう。

もう一つ大切な夏至のお祝いは、家族や友人が大篝火を囲んで集まることです。このお祭では、野外で一緒に歌い、飲み、食べ物を分かち合い、焚き火を飛び越えたりして大いに楽しみます。今や多くの人が大都会に住み働くようになってしまったので、このお祭は都会を飛び出し、夏の夜を野外で楽しむ最高の機会になっています。ラトビア政府は、国民のこの要望を認めて6月23 - 24日を国の祝日と定めました。

他の多くのお祭同様、真夏の夜に行われる多くの儀式や伝統行事は、生きとし生けるものの繁殖を願うもので、その起源はキリスト教がラトビアに広まる以前にまで遡ります。そのために、6月23日夕に夏至の祭を行うのは、ある種皮肉な面があります。実際の天文学上の夏至は6月21日頃ですが、夏至の祭り6月23日はジャニスの日やバプテスマのヨハネ(キリストを洗礼した)の日の前日に当ります。異教徒とキリスト教の伝統が融合したものがラトビア人の日々の生活に深く浸透しています。

夏至の祝は決してラトビア人固有のものではありません。というのも、その祝は他の多くの国々でも行われている印欧の異教徒による祭典の一つにすぎないからです。しかし、真夏の夜の本質に今もつながっているのは私たちだけと信じたいものです。

(翻訳 中嶋 勝彦)

【寄稿】ソ連時代のリーガの思い出と合唱と私

坂牛　八州（兵庫）
保育園園長・牧師

やりたいことがいっぱい、時間が欲しいとこぼす筆者近影

40年程前の思い出をぼんやり探りながらのリーガなので、今更皆さんにお話できるようなことなどあるのかなと思いつつ、浮かぶままに経緯も含めて書いてみた。

1969年、米ソ冷戦時代、幾度ものソ連の拒否権に阻まれた後、ようやく日本も1956年、国連加盟をはたして10数年経ってはいたものの、日ソ関係はさ程良くなかった時代であった。

24歳だった。設立間もない神戸国際大学に勤務していたところ、左系の友人から「日ソ協会がソ連旅行のツアーを募集している」という話をもってきた。それもソ連青年共産党・コムソモールのご招待ということで25日間で5万円とのことであった。当時、月給が4万少々で1ドルが360円、1ルーブルが400円の頃で、姉が全額出してやるとのやさしい言葉に乗せられ、小田実のベストセラーであった「何でも見てやろう」精神で、大学も快く許可をくれたので、夏休みのほとんどをソ連で過ごすことになった。

横浜からソ連船、トルクメニア号で出発。夕食時、ナホトカ大学生たちによるの船上歓迎パーティーがあり、ナホトカ到着、入国審査、シベリア鉄道なのかどうか列車でハバロフスクへ。ハバロフスク大学生の歓迎パーティーの後、空路モスクワへ向かう。モスクワではクレムリン、レーニン廟などモスクワ大学生の心のこもった熱心な案内をいただいた。歓迎パーティーは毎日どこの町へ行っても毎晩コムソモールが催してくれた。

青年共産党員・コムソモールの歓迎パーティーはいつも大歓迎で、ご馳走がいっぱいであった。ご馳走の中身についてはあまり記憶にないが、キャビア、チーズ、ウオッカが並べられた豪華なものであったことだけは、はっきり覚えている。返礼として私は、主として「ソーラン節」をどちらのパーティーでも歌わせていただき、喝采を博した？ことはいうまでもない。

それからソ連各地をあちこち回った。レニングラード（現サンクトペテルスブルク）ではその壮大さに感動しキエフへもいった。キエフではソルフォーズ、コフォーズでおいしい野菜をいただいた。

心がぱっと開けたリーガ

最後に当時ソ連領であったリーガに到着。第一印象はリーガの町の美しさであった。それは大変垢抜けて、しゃれていて、そして街も人も明るく感じた。

ソ連のどの街も何故か薄暗く重苦しく感じていたのに、リーガにはぱっと心が開けたような開放感があった。ここはソ連ではないと感じ、その気持ちをリーガの放送局の青年共産党員に話したのをおぼえている。その理由はソ連崩壊後やっとわかったものである。

また、リーガの海岸で泳いだ。さすがバルト海、真夏というのに水の冷たさには驚いた。でも、リーガの人たちは多勢泳いでいたので体感が違うのだと勝手に納得した次第。

リーガ来訪のときは合唱や歌を聴くことはなかったが、その後、私が英国留学をして帰国後の1975年6月にわがふるさと神戸と姉妹都市提携を記念してリーガの「アヴェ·ソル合唱団」が来神して、いっしょに歌った。その時、医者をされていた男性団員とリーガ訪問時の放送局の青年共産党員とはしばらく文通をしていたが、今は昔ということとなってしまった。

アヴェ・ソル合唱団のバナー

今、田舎（兵庫県高砂市）で保育園の園長をしている。合唱とは大学（立教大学グリークラブ）時代に出会ってそのとりこになり、人生の伴侶になってしまっている。下手の横好きで作曲して歌ったりもしている。子どもの歌や園歌、社歌、さらには演歌も手がけている。昨年、長い間編曲だけを担当していた神戸男声合唱団に25年ぶりに復帰した。一方、子どもたちに合唱の喜び、すばらしさを感じてもらいたいと児童合唱団を創設して3年になる。苦労は多いが毎週土曜日の練習日が楽しみ。

「合唱で独立を勝ち取ったラトビア」のような心が培われることを願って、日夜合唱に情熱をかたむけている。（さかうし・やしま）

※著者から40年前にリガで写した写真コピーが送られてきたが解像度が低く、残念ながら掲載できませんでした。

ラトビア語教室あれこれ

事務局　植木 佐代

今年の1月に、入門コース・初級コースの2クラスでスタートした第2期ラトビア語教室は、早くも後半に入りました。

大使館のオルロフス·オレグさんが4月27日に結婚なさると伺い、いつもお世話になっている感謝と結婚のお祝いの気持ちをお伝えしようと、16日の入門コース終了後にささやかなパーティーを計画しました。少々急な連絡でしたが、当日は12人が参加し、こじんまりしたお店を貸し切りで、オレグさんを囲み、和やかなひとときを過ごしました。奥様になる田中愛子さんとの出会いは7年前にラトビアで……。それぞれ、ラトビア·日本の国籍のまま、新生活をスタートなさるとのことです。お仕事の都合でお見えになれなかった愛子さんのお写真も見せて戴き、お祝いムードも高まりました。オレグさんは大変喜んでくださり、「奥さんを大切にして、明るい家庭を築いて行きたいので、これからもどうぞよろしくお願いします」とコメントを寄せてくださいました。

新婚のオレグさんを囲んで
ささやかなパーティ開催（4月16日）

教室は、1・3週が入門コース、2・4週が初級コースの日程で進めていますが、4月は水曜日が5週目まであったので、30日に、両コース合同の親睦会を行いました。普段は時間ぎりぎりに駆けつけ、授業が終わると帰途を急ぐので、なかなかゆっくり話す時間がありませんが、この日はいつも授業を始める6時30分のスタートで、たっぷりのお料理と適量のアルコールで、2時間あまりを楽しみました。

楽しい会の話題ばかりでしたが、肝心の授業も、入門コースは、「名詞の単語の性や数によって形容詞の語尾が変化する」規則を覚えたり、初級コースは、講師の堀口氏が黒い前掛けをしてウエイターに扮し、レストランでのオーダーの仕方を習うなど、それぞれ順調に進んでいます。7月の旅行もいよいよ具体化してきましたので、教室で学んだことを少しでも役立てたいと楽しみにしています。

ラトビア語教室に参加して

中村　健太郎
（筑波大附属駒場高校　サッカー部）

僕がラトビア語を習い始めたのには特に理由があるわけではありませんでした。他の方々のようにラトビアに行く予定があったり、ラトビアの民謡を歌うというわけではなく、新聞に載った案内みて面白そうだと思ったので、始めることにしました。ですので、習い始めてから、ラトビアに行く人や、ラトビアと関わりのある方が大勢いらっしゃるのに驚きました。

初めてラトビア語教室に行くときは「高校生が行って場違いではないだろうか」と心配でした。今までラトビア語を習っている友達がいた訳ではありませんし、学生が行くような教室ではないのかなあ、と考えていたからです。でも実際に行ってみるといろんな方がいて、考えていた以上に楽しい教室でした。

大使館で行われるラトビア語教室の最大の魅力は、毎回ラトビア人の方が来られて直接教えてくださることです。本当と言うと、これは他の方の受け売りなのですが、よくよく考えてみると確かに他の語学教室ではこのような体験はできません。ラトビア語を語学として習うのではなく、ラトビアに行って話したり、文化に触れるという目標がある人にとっては、とても楽しく素晴らしいものだと思います。

最初に書いたように、僕がラトビア語を始めた理由は「面白そう」だからでした。今も半分はその気持ちです。でもそのうちヨーロッパに行くことがあれば、ラトビアにも行ってみたいと思います。

そのときに少しでも話せるように、今は語尾の活用に悪戦苦闘中です。

今年もオランダに行ってきました

水谷 鏡子
㈲華のハーモニー

今年も2月25日から11日間、オランダへ行った。例年、この時期にオランダの国立園芸大学ストアーズに花の勉強に行っている。ヤン·ファン·ドゥーズベルフ教授にプライベートの授業を受けるようになって8年になる。日本のフローリストの間で有名な、ベルギーのフローリスト·ダニエル·オスト氏もヤン教授の生徒だった。このようにヨーロッパで一流といわれるフラワーデザイナーは、教授の指導を受けている人が多い。彼はオランダが誇るマスターフローリストであり、国立園芸大学の教授である。先生はヨーロッパ·フラワー·デザイン·アカデミー（EFDA）の主要メンバーの一人であり、フラワーカンシルのメンバーである。花業界のみならず、流行を生み出すメンバーの一人としても、オランダが世界に発信するアートをアピールする大きな存在の人である。

訪れたオランダはちょうど日本と同じくらいの気候で、道々に水仙やクロッカスが咲き乱れていて、私の目を楽しませ心を和ませてくれた。さすが花の国オランダである。ピンク色の桜の木に小鳥が止まり、ゆさゆさと小枝が揺れる穏やかな風情をホテルの窓から眺めていた。桜の木の向こうには教会の塔が見え、そこに大きな時計がついていた。そんな風景の中に、オランダにも春が近づいている気配を感じた。

私は毎年テーマを決めてヤン教授

ヤン先生と筆者

からプライベートのご指導をいただいている。花の世界で教授からプライベートにレッスンを受けているのは、大学始まっていらい私がはじめてということである。ピアノやバイオリン、バレーなどヨーロッパのアーティストで一流になるためには、その道の専門家に、直接プライベートの指導を受けることだといわれている。今でこそ日本でもこれは常識になり、多くの若い人たちが勉強をするためにヨーロッパを訪れている。花の世界では私が最初であり、それまではだれもいなかったようである。

今回は、「花の色彩学」を選び、色彩の理論と実技を朝の9時から夕方の6時まで、4日間連続の授業を受けた。授業は、テーマにあった音楽を聴きながらの勉強である。パワーポイントを使い、理論と実践という形で進められた。時々自然の植物を探しに、寒い中大学の畑に行き、枯れ木や芽吹いた植物を採集させられた。その冬景色からのインスピレーションで創作するのである。そのできた作品は大学のフロアーに飾ってくださるので、多くの学生たちが見てくれる。オランダの学生たちは親しみやすく大らかである。自分の作品を人が微笑みを持ってみてくれることはとてもうれしいものであり、さらに良い作品を創ろうというエネルギーが沸いてくる。

ヤン先生の授業は10時と3時にティータイムがあり、紅茶·コーヒー·ジュースとお菓子が出る。集中して学ぶために、このティータイムがとてもうれしい。先生もかなり集中して講義をされるので、お互いにこのティータイムはリフレッシュのための貴重なショートタイムになる。

来年の授業は「花の歴史」を予定しているが、色彩も追加していただきもう一度学ぶことにきめた。花の色彩は花をデザインする上で、最も重要な要素である。

音楽短信

指揮者・前田二生さん

新東京室内オーケストラの常任指揮者·前田二生さんが4月23日、紀尾井ホールで同オーケストラの「ウィーン古典派の系譜シリーズ」第23回定期公演を行った。このシリーズはモーツアルト、ハイドン、ベートーヴェンら古典派巨匠の作品はもちろん、その流れを汲む後世の無名作曲家の、殆んど演奏されない埋もれた珠玉作品を鮮やかに蘇らせて好評を博している。この日はカール·ツェルニーの「序曲」。イグナツ·ブリュルの「悲愴」、クルト·ロガーの「合奏協奏曲」などを演奏した。

前田さんは東京レディース·シンガーズの常任指揮者としても活躍する他、中国中央テレビ·放送合唱団の主席客演指揮者。海外での活躍が多く、1989年以降ウィーン楽友協会に於ける「ヴィーン芸術週間コンサート」、「ハイドン記念週間コンサート」、「ウィーン春の音楽祭」等の主要イベントに19年間連続出演している。

ピアニスト・矢田ちひろさん

06年に国立ソフィア・フィルとベーヴェン「皇帝」、07年にはロシアのサンクトペテルブルク・カペラ交響楽団と同「三番コンチェルト」など海外のオーケストラとの共演で絶賛を博したピアニストの矢田ちひろさんが、今年も5月6日にイタリア・コモのオペラ座で当地のオーケストラとベートーヴェンを弾いた。

国内でもR.Iジャパン主催のコンサートなどで定期的に演奏活動を続けるが、10月11日（土）に津田ホールでリサイタルを開く。

東京カンタート08

今年も4月29日から5月5日まですみだトリフォニー大ホールなどで開催。今年は初の試みとして若い指揮者のための合唱コンクールが行われ、ラトビア放送合唱団、同室内合唱団の指揮者として著名なカスパース·ブトニンシュさんが講師、審査員として招聘された。同指揮者は最終日のクロージングコンサートでトウキョウ·カンタート08男声合唱団（日本の特別編成合唱団）を指揮、トルミス、ドゥプラなどの作品を演奏した。

情報断片

♪…昨年の那覇に続き、北海道·旭川、大阪に相次いで名誉領事館が開設され、今号は名誉領事各位への祝意を込めて特集を組みました。日本とラトビアの絆がますます強くなりそうで、ラトビアを愛する私たちにとっても本当に嬉しいことです。

♪…北海道といえば常識的には札幌に設置されるべきでしょうが、旭川に設置された背景に、お隣の東川町が16年も前からラトビアと深い文化交流を続けていたことがあります。充実したラトビア館もオープンしました。01年に当時のフレイベルガ大統領が、「東川町に名誉領事館設置を検討したい」と提案されていました。西川将人旭川市長は、「東川町のお陰で、札幌ではなく隣の旭川に来たのだからホントにタナボタ」と喜びを隠し切れない様子でした。

♪…大阪は、1兆円企業の大和ハウス㈱が全面的サポートを打ち出したことに計り知れない価値を感じました。ラトビアは材木が基幹産業の一つですから、経済交流も加速されそうです。さらに音楽交流にも力を注がれるようですから、私たちも力強い味方を得た気がして心強い限りです。両名誉領事のご活躍を編集子も心から祈ります。

♪…歌手の小田陽子さんのブログで、彼女がヴァイヴァルス大使の要請で旭川市、東川町へ同行したことを知り、ハタと思いついて彼女に原稿を依頼しました。何度かメールを交信して彼女の愛らしくてチャーミングな人柄を知り、さらに感性·観察力の豊かさと文章力に感嘆しました。井下名誉領事の人柄も浮き彫りにしながら、私などには到底書けない新鮮なレポートを寄せてくれました。お礼にPRを一つ。7月7日（月）夜、品川パシフィックホテル30階のシアターラウンジ「ブルーパシフィック」に出演されます。

♪…いよいよ「歌と踊りの祭典」視察団が出発します。私は残念ながら仕事の関係で参加出来ませんが、次号は土産話を満載する予定です。ウィーンで野村三郎先生が一行を待っていることも、旅行をさらに充実させる筈です。実を言うと彼は早稲田グリーで私の1年後輩、私だけが“野村!”と呼び捨てに出来る間柄。グリークラブでは1年先輩は神様なんです。とにかく、実り多い旅を満喫してきてください。何よりも現地でラトビアの人たちと交友を深めてきてください。（徳）

名刺広告募集

8月発行予定のLatvija13号に名刺広告（残暑見舞い）を募集します。来年は創立5周年演奏会や記念行事を計画する他、ラトビア音楽発信基地設置やミニコンサート定期開催などを考えていますが、課題は財政基盤です。会員·関係者各位のご賛同を心からお願い申し上げます。

専務理事　加藤晴生
常務理事　徳田　浩
（広報担当·Latvija編集長）

記

料金　1枠　10,000円（タテ35mm,ヨコ70mm）※お一人で多枠掲載歓迎
締切　7月25日（金）
原稿　掲載ご希望の内容を先にメールかファックスで編集室へお送り下さい。使用文字、大きさ·割付けは原則として編集室に一任ください（横書き）。社名などロゴで掲載ご希望の方はお送り下さい。

私たちは人びとの健康を高め

心豊かな社会づくりに貢献します

TAIHO 大鵬薬品

http://www.taiho.co.jp/

抗がん剤の研究・開発に取り組んで40年　これからもがん領域のリーディングカンパニーとして歩み続けます